



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第二三一号〜

大暑^{たいしよ} 七月二十二日



かみなりや

夏の風物、夕立に雷。ざっと降る雨にひとときの涼は得られますが、雷は怖いもの。それは江戸の昔も同じだったようです。

夕立や伊勢の壺屋^{つばや}の煙草入れ

古なる光る強い紙なり（降る鳴る光る強い雷）

壺屋の煙草入れとは、革に似せた和紙製のもので、「擬革紙^{ぎかくし}」と呼ばれ、お伊勢参りの土産として人気を博しました。紙製ながら堅牢である品質を、雷にかけた川柳。この「かみなり」を店名にした革工藝の店が内宮前の宇治浦田町に開店しました。店内には擬革紙をはじめ、全国の革職人六十人が作った財布や名刺入れ、鞆など革製品千点ほどがずらりと並びます。

革工藝の店は構想から二年、スタッフが新潟県から奄美大島まで全国の革職人を訪ねて、製品を揃えました。それだけに目新しいものも多く、牛、仔牛、鹿、豚、山羊：そして鮫^{さめ}も。鮫は伊勢神宮の神饌^{しんせん}に使われることから、伊勢では「さめのたれ」が郷土食として親しまれてはいますが、鮫革の財布は初めて見ました。

皮革は古くから人々の生活の中で使われてきた素材です。動物の体を包んでいた皮は剥^はがすとすぐに乾燥して硬くなりますが、腐らないようにして柔らかく加工する（なめす）と、長く使える「革」になるのです。

「革製品は常に手に触れるものも多く、使い手によって育ち方が変わってきます。長く使い込んでもらい、愛着をもってほしいですね」とスタッフ。また、革職人たちが自分の個性とともに、実用性を重視する姿勢にも信頼ができたと言います。使えば使うほどにじみ出る革製品の「味」は、実用性を兼ねたものであってこそ。日本にも革の文化が根づいていることを改めて感じました。

文 千種清美

